

# ブーバーの平和思想について

松田高志

## Summary

### Martin Bubers Gedanke des Friedens

Takashi Matsuda

Heutzutage verändert sich die Welt sehr gewaltig. Der Abbruch der "Berliner Mauer" ist nur ein Symbol dieses gewaltigen Wandels. Wir haben jetzt keinen klaren Ausblick in die Zukunft. Es ist uns besonders schwer geworden, ein ganzes Bild des Weltfriedens und den Weg zu seiner Verwirklichung zu finden. In diesem Aufsatz möchte ich Martin Bubers Gedanken des Friedens untersuchen und eine klare Aussicht auf den echten Weltfrieden bekommen.

Buber hat als jüdischer Denker drei grausame Kriege erlebt und dadurch schrecklich gelitten. Im allgemeinen sieht das Bild des Friedens zunächst undeutlich und vage aus, während das Bild des Klieges sehr handgreiflich und spannend erscheint. In seinem Vortrag: "Das echte Gespräch und die Möglichkeiten des Friedens", hat er uns die Idee "des Großen Friedens" vorgelegt. Sie bedeutet nicht, daß es keinen Krieg mehr gibt, sondern daß es etwas gibt, was größer und mächtiger ist, als der Krieg. Ein Krieg beginnt da, "wo die Menschen sich nicht mehr miteinander über die strittigen Gegenstände zu unterreden vermögen", aber wenn die Menschen miteinander das Gespräch zu führen versuchen, nähert der Friede sich. Im "Großen Frieden" findet also das echte Gespräch überall und häufig statt, indem die Menschen sich gegenseitig verstehen und bestätigen, so daß sie sich beruhigen und miteinander beleben können.

Ist es aber in unserer Zeit möglich, solchen Frieden zu verwirklichen, wo die Krisis des Menschen, d. h. die Krisis des Vertrauen im Grund beherrscht? Buber behauptet, daß "gerade die Tiefe der Krisis uns zu hoffen ermächtigt." In der Tiefe ist die Krisis "nackte Entscheidung" und läßt uns Urkräfte aufrufen, die Umkehr vollzuziehen.

Buber nennt den Standpunkt dieser Behauptung den "großen Realismus", der zwar alle die bestimmaren Realien überschaut, aber auch die Realien akzeptiert und respektiert, die nur unständig oder nur durch die tiefen Besinnung erlebt werden können. Zum Beispiel "soll der Mensch nicht durchschaut, sondern in seiner Offenbarkeit und seiner Heimlichkeit . . . . immer vollständiger geschaut werden. Wir wollen ihm nicht blind, wohl aber sehend vertrauen." Buber meint, daß es das Böse ist, nur einer Seite oder einem Teil des Menschen verhaftet zu sein, während es das Gute ist, mit dem ganzen Wesen zu tun, so daß das Böse keine gründliche Substanz ist. Der Streit zwischen den Religionen bildet das letzte größte Hindernis für die Verwirklichung des Friedens. Nach seiner Meinung ist die Offenbarung das Ereignis der Begegnung des Menschlichen mit dem Göttlichen. Also ist sie dem Menschen wahrhaft, der sie erlebt hat, aber er darf sie nicht als etwas Absolutes behaupten, als ob sie von seiner Existenz unabhängig wäre.

Mir scheint, daß Bubers Gedanke des Großen Friedens uns eine Aussicht in die Zukunft unserer Welt geben kann.

## 序

今日の世界は、誰もが予期しえなかったような激しい変化のただ中にある。ベルリンの壁の撤去によって象徴されるように、政治体制や国際関係の流動化は著しい。冷戦構造がくずれ、東西協調へと向かう流れに期待したいが、しかし反面、経済競争の過熱やそれと不可分の自然破壊の激化、新たな民族抗争の問題等が起きている。又、物質主義と言われる時代にあって、物質的豊かさを享受しうる国民は、地球全体から見れば、なお少数であろう。おそらく半数以上は、劣悪な状態にあり、更に一層窮乏化している人たちも少なくない。しかし物質的豊かさを享受し、世界の動向にイニシアティブをとりうる国民の間においても、心身の健康が触れられつつある事実は看過しえない。

ところでこのような状況全体と平和の問題は、やはり決して切り離せないように思われる。どの問題にしても、直接間接に平和の問題とつながっているであろう。しかし今日、平和実現、平和活動と言っても、その見方や立場は混迷しているかに見える。そしてそのことが、状況全体の見通しや流れの方向を見定めることを難しくしているのではないだろうか。

ここに、ブーバー Martin Buber の平和思想を取り上げ、それを手懸りとして、平和とは何か、又平和が時代の流れを導くものとして考えられるならば、そのような平和はいかにして可能かということについて考えてみたい。

ブーバーは、周知の通り今世紀の前半から中頃にかけて主にドイツとイスラエルで活躍したユダヤ人思想家であるが、第一次、第二次の世界大戦とアラブ・イスラエル戦争の三度の戦争を直接体験し、ほとんど生涯にわたって平和を希求し続け、その思想を深めていったと言ってよい。従ってその思想は、全体として平和の思想であると言えると思うが、ここでは特に彼が平和の問題を主題的に取り上げている箇所を中心にその思想を見ていくことにしたい。

### (一)

平和とは何かを考えようとする、すぐに気づくことは、戦争のイメージは、極めて豊富で、鮮明であるのに対し、平和のイメージはそれに比べまことに貧弱で、迫力に乏しいということである。平和教育とか平和展と言っても、結局戦争の残虐さや悲惨さ等を示す文学や記録、写真や現物を見せたり、展示することになりやすい。これも戦争の強烈なイメージによる影響力を考えるからであろう。

平和を定義する際も、争いがなく穏やかといったような消極的なもので済まされることが多い。日本語の「平和」という言葉も、消極的な言い方であるが、外国語の平和を意味する言葉を調べても、その感が強い。例えば、ドイツ語の Friede は、einfrieden (垣で囲む) という動詞があるように、もともと垣とか囲いということの意味し、そこから保護とか安全ということになり、平和を意味するようになったらしい。英語の peace や pacific やフランス語の paix は、ラテン語の pax に遡るが、pax は、もともと講和とか協定という意味である。ギリシア語

の平和を意味する *eirēnē* は、本来安息とか休養を意味する。いずれにしても、ダイナミックに大きく広がっていくような力強さを表わすものではない。ただヘブライ語の *shālôm* は、例外的に繁栄とか健康等々を含んだダイナミックな状態を表わしている。これについては、後に少し詳しく述べることにしたい。

平和は、歴史的に見ても戦争が跡切れた状態、あるいは武力によって守られたり、周囲を平定した状態として存在したことが多い。つまりほとんどの場合、平和は戦争を凌駕するような力を持った状態としてあった訳ではない。最近になり、平和をもっと積極的な意味を持つものとして定義すべきであるということが言われるようになった。例えば、平和を武装平和と非武装平和にはっきり分け、武力による威しや均衡によって保たれるのは、真の平和ではなく、武力なしに相互の信頼や友好によって成り立つものこそ真の平和であるとされる。又周知のようにノルウェーのガルトゥング Johan Galtung は、平和を二種類に分け、最低限直接的暴力（武力）がふるわれない状態を消極的平和と呼び、それに対し直接暴力がふるわれないだけでなく制度や組織による恒常的な人権侵害や貧困、文化や自然の破壊等、いわゆる構造的暴力が克服された状態を積極的平和と呼んでいる。これは、平和の意味を拡大したと言えるが、それと共に平和のイメージがこれ迄より遙かに鮮明になったと言ってよいだろう。

ところでブーバーは、『真の対話と平和の可能性』という講演（1953年）<sup>11</sup>の中で、単に戦争のない状態としての平和に対し、次のような「大平和」*der große Friede* という考えを表明した。ブーバーは、イタリアのシエナの市庁舎の古い壁画を用いてそれを説明している。その壁画には、個々の市民道徳を象徴する気品ある婦人像が多数画かれているが、その中央に一際高く聳え立ち、悠然とした、威厳に満ちた婦人の像がある。その名は *pax*（平和）である。この像は、平和が単に戦争がないという消極的なものではなく、戦争に比べてむしろ遙かに大きく、力強い何かであることを示している。ブーバーによれば、戦争は、河川の水が海に注ぎ込むように人間の情熱やその他の諸力が注ぎ込まれるが、「大平和」は、鉱石が火の中に入れられるように人間の諸々の情熱や力がそこに入れられ、溶けて変貌し、諸民族が闘い合う以上の力強さで互いに建設的な行為をし合うのである。従ってこの平和は、戦争の中断や小休止ではなく、一層偉大なる行為である。

ユダヤ人であるブーバーが、このような平和観を着想したということは、先に述べたようにヘブライ語の *Schālôm* が豊かで積極的な意味を持っていることと無関係ではないだろう。関根正雄氏によれば、「『平和』というと争いのない、調和した平静な状態を云うと思われ易いが、ヘブライ語に於て『シャーローム』というのは全くそれに反し、平静な状態とは逆に生命のあふれた動的な状態、力の満ちみちて一杯な状態を云うのである。それ故宗教的用語としては『救済』の意に近づくのであるが、『シャーローム』の由来の特長は之が具体的な物質的経済的政治的状态と分離した単なる精神的靈的問題に対してだけ用いられない点である。寧ろ精神と物質、内と外との世界を含めた全体に於て分裂のない力の溢れた状態が『シャーローム』なのであって、旧約人の希求して已まなかったのはかかる意味の『平<sup>シャローム</sup>和』の状態であった。」<sup>12</sup>と言われる。引用が長くなったが、これは、ブーバーの言う「大平和」に近いものであると言える。

う。これに比べれば、「非武装平和」やガルトゥングの「積極的平和」もなお消極的な規定であると言わなければならない。

古代イスラエルの Schälöm の意味は、単に楽天的に定義されたものではないであろう。むしろ真に危機的な状況の中から生まれた信仰的確信であり、定義であったと言える。ブーバーも、既に述べたように三度にわたって直接戦争を経験しているが、最初の第一次世界大戦の最中に芽生えた、平和思想の核心とも言える「我一次思想」は、後の一層苛酷な第二次世界大戦、アラブ・イスラエル戦争においても撤回されることなく、むしろより具体化されていった。

この「大平和」を表明した講演は、1953年旧西ドイツ、フランクフルトのパウロ教会でドイツ書籍業組合の平和賞を受賞した際の記念講演であるが、ナチスの暴虐の日々からまだ遠くない時期に、ほとんどのユダヤ人が心理的にも政治的にも猛反対する中でドイツに赴き、行なったものである。この講演は、両民族の関係が絶望的な状態にある中で行なわれたというだけでなく、又、世界的に東西の冷戦状態が決定的になった時期であり、更にブーバーをして、経験した三つの戦争のうち最も苦しいものと言わしめたアラブ・イスラエル戦争が起きており<sup>9)</sup>、そのような中で「大平和」の確信が披瀝されたことに十分留意しなければならない。これは、単に彼の個人的な勇気の問題ではなく、彼にとっての思想の真理性の問題であったと言える。

ブーバーは、この講演において、ナチス時代のドイツにおけるユダヤ人大量虐殺は、人間的次元を超えたものとして、憎悪するとか許すという性質の問題ではないとした上で、ドイツ人の全体を一括して論ずることは出来ないものであり、実際多様な層があり、特に死の危険をおかしてまで人間的にふるまってくれた人たちを知っており、そのような人たちに親密さと畏敬の念を覚えずにはおれないということを表明している。

ブーバーは、以上のような前置きをした上で、どの民族の中核にもこのような反人間的人間に対する人間的人間 homo humanus gegen homo contrahumanus という構造があると述べ、それを内的弁証法と呼んでいる。特に戦争に加担していないドイツの青年達に対して、この反人間的なものに対する戦いへの参加を呼びかけ、又あらゆる民族や社会の中核にある内的弁証法に期待し、今はそれぞれ孤立している、反人間的なものに対する戦線が、一つに連帯していくことを願っている。

## (二)

ところで、ブーバーの言う「大平和」の本質は、演題の『真の対話と平和の可能性』が示すように、まさに真の「対話」が生き生きと活発に行なわれている状態である。「対話」 Dialog, Gespräch は、彼の思想が「対話的思想」と言われるように、彼の最も中心的な関心事であった。従って「対話」は、その思想全体に関連しているが、ここでは必要と思われる特徴だけを述べることにしたい<sup>9)</sup>。

「対話」は、たとえ立場が対立していても相互に相手の存在全体を受け入れ、認める bestätigen ことである。但しそのことによって、対立は直ちに解消するわけではなく、人間として共

に担い通すことが出来るようになるのである。いかなる争いも、対立者を臆断によって問答無用とか言語道断であると決めつけることによって始まる。しかし争いの最中において、声高な叫びではなく、いわば声無き声として、対立が決して争いによって解決されるものではないことが、それぞれの心の中に響き、再び対話へと向かうことによって争いは終焉する。

「対話」は、相手の存在全体を受け入れ、認めることであるが、もう少し言えば相手を他の誰でもないこの唯一かけがえのない存在として認めることである。単に社会や組織の一員としてとか、地位、役割においてとか、好ましい能力や価値を持った者として認めるのではない。従って、こちらの基準や枠におさまらないありのままの存在をそのままに受け入れるが、それは相手の他者性をリアルに受け入れることであるとも言える。相手の存在全体を受け入れるとは、相手のあり様をより好みせず受け入れることであるが、それだけでなく目に見えないところ、可能性としてあるところまで全て含んだものであり、その限り全体は決して輪郭づけられたり、定義づけられたり出来ず、ただ信頼し、根拠なしに認めうるだけである。又これと一つに、こちら側も相手に対し見せかけや隠しだてをせず、ありのままを差し出し、又自己へのとらわれから離れなければならない。このようなことが自発的、相互的に起こる時に、「対話」が成り立つのである。

人間が輪郭づけられ、定義づけられると、一定の能力や価値に還元され、そこに比較や競争、差別や管理、支配が起こる。お互いにかけてがえの無さが認められ、輪郭づけなしに受け入れ合い、信頼し合う時には、自他の仕切りや枠がなく、自由に安心して力を発揮し合い、豊かに成長していくことが出来る。これに対し、いかに繁栄を誇っても自他の分け隔てがあり、目に見える面だけで評価され、競争や差別や管理によって成り立つ社会は、貧しい世界であると言わなければならない。

しかしブーバーによれば、「対話」はこれだけに尽きるものではなく、まさに「出会い」Begegnungであって、互いに存在の根源から生かし合うものとなることであり、それによって相手（他者）と真に根本的につながると共に本来的、全体的自己になり、又それと一つに「永遠なるもの」につながるのである。以上のようなことが「大平和」の特徴として言うことであろう<sup>9)</sup>。

### (三)

しかしこの時代にあって、果たして真の「対話」が生き生きと行なわれるような「大平和」を望むことが出来るのだろうか。この講演の行なわれた時期は、第二次世界大戦がようやく終結して間もなくの頃であるが、決して明るい展望が開けていたわけではない。むしろ第一次世界大戦への反省にもかかわらず更に輪を掛けたような凄じい暴虐が繰り返されたことに対する徹底的な人間不信と新たな冷戦状態の脅威と不安の中にあって、到底「大平和」を望みうる状態にはなかったと言ってよい。

ブーバー自身も、既に述べたように単純に「大平和」を説いた訳ではない。むしろ彼は、今までに無かったような危機の深さを感じている。その深い危機は、戦争がもたらすようなもの

ではなく、むしろ戦争をもたらすような根源的な危機である。これは、人間の言葉ないし対話の危機である。つまり語りかけと応答におけるとらわれのない直接性の危機である。それは、まさしく人間そのものの危機であるが、それを一言で言えば、信頼の危機である。それは、誰かへの信頼の欠如というのではなく、信頼それ自体、つまり神に真に呼びかけて祈ることが出来ないことと隣人との真の対話が出来ないことがその二つの面であるような存在への信頼の欠如である。

しかしブーバーによれば、我々に「大平和」への希望を可能にしてくれるものは、まさにこの危機の深さなのである。「最も深い困窮においてもなお、否そこにおいて初めて、今まで予感しえなかった超克が起こりうるのだ。」(I-111 [註3]を参照) 危機 *krisis* は、その深さにおいて裸のごまかしようのない、待たなしの決断である。(Krisisの語源であるギリシア語の *krisis* は決断を意味している。)それは、悪化か改善かの動揺ではなく、崩壊か蘇生かの決断である。一層正確に言えば、そのまま直ちに崩壊するか、それとも蘇生へと決断するかである。絶望に陥った者が、根源的な力をふるい起こし、存在の転回(復帰) *Umkehr* を遂行しようとする時、危機以外においては現われなかった力が働き出すのである。

ブーバーは、ここにおいて「大いなるリアリズム」*der große Realismus* という立場を表明している。これは、誰もが経験しているもの、実証可能なものだけに限定するリアリズムではなく、それらを受けとめながら、更に危機的、一回的出来事においてしか感得出来ないもの、内面的な深みへの感受性においてのみ捉えうるものをも受け入れるより全体へと開かれた立場である。ここでは、誰もが承認しうる危機的状況の要素を見極めるだけでなく、その根底に密かに働いている潜勢力、浄化し、治癒しうる力(ブーバーによれば「最もリアルなもの」と言われる)を感得する立場である。今や、どの民族、社会のうちにも内的弁証法として存在している、反人間的なものへの戦線に参与する者たちが横断的に連帯すると共に、この「大いなるリアリズム」に徹することによって危機の根底にある潜勢力を顕在化させ、そのことによって「大平和」への道が開かれると言われる。

「大いなるリアリズム」は、この講演の行なわれた年の前年、1952年4月、ブーバーの北米講演旅行の終わりに、ニューヨークのカーネギー・ホールで行なわれた『この時代の希望』という講演<sup>6)</sup>において既に表明されている。この講演は、いわゆる東西対立が激化した状況の中で果たして我々は平和への希望を持ちうるのかという問題を正面から取り上げたものである。

それは、先ず東西対立をフランス革命の三つの原理の分裂から説明している。かつては、自由と平等という抽象的原理が、具体的原理である兄弟愛によって結びつけられていた。人間は、互いにただ兄弟姉妹と感じ、つながり合う時にのみ真の自由と真の平等が同時に実現するのである。それに対し、兄弟愛から分離した自由と平等は、矛盾、対立を起こし、それぞれ自己絶対化し、他を否定するようになる。その際、それぞれの原理をかかげる各陣営は、ただ相手を誤った立場として見るに止まらず、自分の方は、正しいイデーの実現であり、他は、利己的利益追求を化装したイデオロギーの主張でしかないと決めつける。ここから、陣営間の不信は決定的なものになる。ここに、今の時代の根本的不信があるとされる。

ブーバーによれば、その不信は生得的な、何かに対する不信ではなく、この時代特有の実存的不信である。単に他者の正直さ、誠実さを疑うのではなく、人間存在の内的統合性そのものへの不信である。それは、他者の主張を無意識的コンプレックスの表われと見るか、あるいは集団的利害の化粧的表現としてしか見ることが出来ず、そこではその「看破」Durchschauungないし「仮面剥し」Entlarvungが不可避である。これは、フロイトやマルクスの理論のうちに、学問的に合理化されたのである。しかしいかなる不信の時代にあっても、自分の存在を認めて欲しいという人間の欲求は無くならない。自分自身によって認めようとすることも、集団によって認めてもらうことも結局挫折せざるをえない。ただ実存的不信が克服され、真の対話的關係が蘇生するしかない。しかしそれは可能か。可能だとすれば、それはいかにしてか。

ブーバーは、それが可能である為には、次のことが重要であると言う。それは、「批判の批判」である。つまり「看破」し、「暴露」した要素やその上に立てられたテーゼを人間の全体構造の認識と同一化する「イデオロギー批判」の誤りを批判し、看破され、暴露された要素を人間の全体構造の中にいかに位置づけるかをねばり強く考えるのである。これは、新しく発見された要素を他の諸要素とのダイナミックな関係の中で、その相対的重要性において捉えるという人間学的方法論の要請である。フロイトやマルクスの理論は、人間存在を一定の要素に還元することによって、人間を無制限に単純化し、実存的不信を増大させる結果を招いたが、この実存的不信の克服は、この「看破」や「仮面剥し」の以前に戻るのではなく、より全体的な展望の中で看破された要素やその上に立てられたテーゼの妥当性の線引きをすることから始めなければならないのである。

ブーバーによれば、これは、漠然とした理想主義ではなく、包括的、徹底的なリアリズム、より大いなるリアリズムである。この「大いなるリアリズム」においては、人間は、看破されるのではなく、その現われた面と依然として密かな面の両面において見られるのである。別の所では、人間の有限性と無限性への参与を同時に一つのこととして見なければならないと言われる。(I-312, N-138 参照) 人間を盲目的にではなく、しっかりと目を見開きながら信頼するのである。つまり特定の背景への還元ではなく、人間の多層性、全体性、固有性において、その全体を受け入れ、認めようとするのである。このような「大いなるリアリズム」において、「この時代の希望」は可能であると、ブーバーは言う。

#### (四)

とは言え、このようなことを言いうるブーバーの人間観はいかなるものか。人間の悪というもの、いかに考えられているのか。更に「対話」が人間の根源的なものであるということがいかに言えるのか。このことについてなお立ち入って考えなければならない。

既に述べたように、ブーバーは、その生きた時代において、又特にユダヤ人としてどうにもならないように見える人間の悪に直面し、悪とは何かについて深刻に考えざるをえなかった。その為に、主著と言われる『我と汝』の発表より遙かに遅れ、約30年を経てこの二つの講演と



ほぼ同時期に初めて悪についてのまとまった考えを発表した。それは、『善悪の諸像』(1952)<sup>7)</sup>という著作であるが、ここで言われている考えを必要な限りにおいて述べることにしたい。

ブーバーは、ユダヤ的信仰の根幹である「神の創造」を主体的に受けとめ、宇宙全体、従って人間存在の全体は善であるという立場をとる。しかしそれを全く否定するような悪の圧倒的な力、リアリティをも又誰よりも深く体験している。彼にとって、悪をどのように考えるかは、抜き差しならぬ最大の難問であった。彼は、結局次のような事実に基づいて解決している。

善と言われるものは、存在の全体を挙げて為すことが出来るが、悪はいかに強固なものであっても存在全体を挙げて為すことは出来ない。悪は、それに抗する諸力を無理におさえつけることなしには為しえない。しかもその諸力は決して窒息させられることはない。ここから、悪はいかに善を圧倒するよう見えても、本来的に善と並び拮抗するような実体的な対極ではないと考える。彼によれば、善は心身の諸力全体の寄せ集めではなく、人間の存在全体が一つの方向において生き生きと調和した「決断」Entscheidungの状態である。それは、又当然自己へのとらわれが無くなり、外へと開かれたあり方である。それに対し悪は、人間存在の一定の部分にとらわれ、混乱し、あるいは堂々めぐりしている「不決断」Entscheidungslosigkeitの状態である。それは、特定のものととらわれ、自己の内に閉じこもったあり方である。

しかしそれでは、悪が実体的なものとして善を圧倒するように思われるのは何故か。この難問に対し、ブーバーは、悪を二段階に分けて考える。つまり部分にとらわれ、混乱ないし渦巻状態にあっても、再び「決断」の状態に戻りうる第一の段階と、部分にとらわれそれが肥大化したまま絶対化され、いわば凍結した第二の段階である。第二段階は、あたかも存在全体を挙げての行為であるかのように見えるが、しかし「決断」ではなく、むしろ「不決断」の状態への固執であり、自己肯定である。これは、固定化、絶対化の力が働いているので、善である「決断」の状態へと移行することは極めて難しい。ブーバーによれば、これが「根源悪」と言われているものである。このブーバーの見方は、悪の強固さを説明しようと思うが、しかし又悪は、どこ迄も存在全体の「決断」の状態である善を前提にしており、善としての「決断」への転回(復帰)の可能性も同時に含んでいる。但しそれは、ただ決定的な危機に直面することによってのみ起こりうるのである。

なおブーバーは、「決断」についても独自の見方をしている。「関係を身をもって知り、汝の現在 Gegenwartに通じている者だけが、決断する力がある。」(I - 112) 「関係」Beziehungは、ブーバーにおいては、「我-汝」であり、「対話」であり、「出会い」であるが、そのリアリティを身をもって知ることによって決断しうると言われる。これは、ブーバーにおいて極めて重要な点であるが、ここでは、少し整理して簡単に述べれば、これ迄述べて来た「決断」は、広義の「決断」であり、「関係」のリアリティによって可能な「決断」は、いわば「高められた決断」、あるいは「決断」の徹底であると言ってよいであろう。「決断」は、既に述べたように、自己へのとらわれや閉じこもりが破られ、存在全体を挙げて他に開いたあり方であるが、「関係」のリアリティを身をもって知ることによって、「決断」のあり方自身を保つ力<sup>りき</sup>みやこだわりからも離れて、真に自由に存在全体が生き生きと働くのである。

ブーバーは、善と悪を以上のような諸像において捉えようとするが、ここから明らかなように、それ自体悪であるような衝動はない。例えば、攻撃本能や支配欲、所有欲等々は、確かにとらわれやすいものであり、従って肥大化しやすく、悪しき衝動の如き働きをするが、しかしその人間にとらわれがなく、それらが、存在全体の中で調和的に働く限り、存在全体を生かすポジティブなものである。人間関係の中で、例えば権力欲や相手をただ享受しようとする衝動は、「対話」において相手を生かす指導力や受容する力として生きてくるのである。これは、ブーバーにおいて衝動の「転回」(復帰)、又はその衝動によって規定された関係の「対話化」Dialogisierung (I-802)と言われる。なお、普通善意と言われるものも、それにとらわれる限り「不決断」であり、当然善とは言われない。

以上のように考えられるとすれば、確かに「決断」の状態である善は、本来的なものであり、「決断」の徹底と言いうる「対話」は、人間にとって真に根源的なものであろう。

## (五)

とは言え、まだ次のような問題が残っているであろう。ブーバーにおいて、平和の本質である「対話」は、人間にとって根源的なものであると言われるが、しかしそれは果たしていかなる対立をも越えるのだろうか。確かに日常生活上の意見の対立は、いかに厳しいものであっても「対話」において担われ、越えるであろう。政治的対立は、しばしば決定的なものであるかのように見えるが、しかし「対話」が成り立つことによって、それぞれの立場の真理性が失われるということはないであろう。もしも対立する相手との共存が認められないとすれば、それは政治的というよりは、むしろ擬似宗教的と言わざるをえない。それでは宗教の場合、異なる宗教的立場の人との共存を認め、否積極的に生かし合うような「対話」は可能だろうか。もしも「対話」が成り立つならば、自己の立場を相対化し、宗教的真理の絶対性をゆるがせにすることにならないだろうか。このような問題がどうしても残ると思われる。もしも異なる宗教の間で「対話」が成り立たないとすれば、ブーバーの言う「大平和」は、結局単なる願いに過ぎなくなる。

例えば「キリスト教と仏教との対話」というテーマが、シンポジウム等で掲げられることがある。その際、もしも「対話」という言葉を単に議論とか協議とか相互に勉強し合うという意味ではなく、真の意味で受けとるならば、参加者が相互に相手の存在全体を受け入れ、認めることがなければならない。もしも相手の立場は誤っているということを前提して、対話しようとしても、それは見せかけのものでしかない。しかし異なる立場を否定することなしに、なお自己の宗教の真理性を保つことが出来るのだろうか。

ブーバーは、自伝に述べているように<sup>8)</sup>、ユダヤ人として既に少年の頃からこの問題の厳しさを体験しており、一生涯この問題に取り組まなければならなかった。それも単に理論的問題としてではなく、抜き差しならない実存的問題としてであった。ブーバーが「対話」と言う場合、この極めて重い問題を常に念頭に置いていたと言えよう。ユダヤ人であるブーバーは、特にキリスト者との「対話」が最も切実な問題であり、そのことについては何度も言及している。そ

の際問題の中核にあるのは、「啓示」Offenbarungである。特定の「啓示」が絶対的なものと見なされる限り、他の宗教的立場は否定されるしかない。

ブーバーは、「啓示」について次のように考えている。神の言葉としての「啓示」は、一義的に認識することが出来、従って排他的に弁護されなければならないような形で人間のうちに下って来るのではない。神の言葉は、いわば眼前を流星のように光を発して落下していくのである。地に落ちた隕石は、光があったことを証明するが、しかし「これが光である」とは言えない。(I-179参照) 少し違った比喻でも述べられている。「啓示」の出来事は、神的内容が人間という空の容器に注ぎ込まれるのではない。神的内容は、火であって、人間という粗鉦を鋸かき直す。そこにおいて生じるものは、火そのものではない。(N-108参照)

「啓示」は、ブーバーによれば神的内容と人間的内容との「出会い」である。それによってもたらされるのは、両者の関係であって、人間から独立した神的内容ではない。神的内容と人間的内容に分けることは出来ない。その関係の内容は、それぞれ人間によって異なる。それは、人間が存在全体を挙げて出会ったものである限り、決して主観的、恣意的なものではないが、しかし神的内容そのものではないが限り、決して絶対的、排他的にそれを主張することは出来ない。

人間は、決して神の真理それ自体を所有することは出来ない。ただそれを信じて、それに誠実に帰依することが出来るだけである。ブーバーは、そのようなあり方を「人間の真実」die Menschenwahrheit, die menschliche Wahrheit (I-1107, N-107ff., N-110, N-138参照)と呼んでいる。人間は、神の真理を誰にも妥当するものとしてこれだと主張することは出来ないが、しかし神の真理を存在全体を挙げて信じ、証する bewähren という「人間の真実」は、常により真実なものにしていくことが出来る。この「人間の真実」に生きる限り、いかに宗教的な立場を異にしても、その相違や対立を越えたところで互いに交わることが出来るのである。(I-1107参照)

かくしてブーバーは、「対話」の「至高の瞬間」について述べている。「対話は、伝えられた、あるいは伝えうる内容の外において、しかもそれが最も個人的なものであってもなおそれを越えたところで成就する。とは言ってもそれは、何か『神秘的な』出来事においてではなく、厳密な意味で事実的な、つまり共通の人間世界と具体的な時間経過に全く組み込まれた出来事においてである。」(I-176)

ブーバー自身、このような「至高の瞬間」を体験したことを述べている。1914年、ヨーロッパの破局が予感される中、戦争を阻止する為の超国家的権威を有する団体を設けようとしてその準備の為に各国から何名か集まり、会議が持たれたが(I-177f.参照)<sup>9)</sup>、メンバーの一人であったブーバーは、その席で或るキリスト者と激しい議論をした末に次のようなことが起こったことを記している。「彼は立ち上がった。私も又立ち上がった。我々は互いに相手の眼の奥底を見つめ合った。彼は、『解けましたね。』と言った。そして我々は、皆の前で兄弟の誓いの口づけをかわした。ユダヤ人とキリスト者の間に横たわる事情から起こった議論は、キリスト者とユダヤ人との連帯へと変容した。この変容の中で対話は成就したのである。諸々の意見は

沈静し、事実なるもの das Faktische が血肉を帯びて生じた。」(I-178)

このような「対話」は、もはや単に「意見の伝達」Kommunikationではなく、「霊的交わり」Kommunionである。(I-177参照) ブーバーは、いかなる宗教的教説の深みをも越えてKommunionとしての「対話」が成り立つことを述べている。しかもそれは、神秘的、非日常的なものとしてではなく、この現実のただ中において、現実を真に充実するものとしてである。

現代世界において、混迷と不信はますます深まりこそすれ、決して克服される方向にあるとは言えない。そのような中で生きる我々は、合理的なもの、日常的なものに対してであれ、反対に非合理的なもの、非日常的なものに対してであれ、はっきりと輪郭づけられた確実に見えるものを求める傾向が強いと言わなければならない。しかしそれは、既に述べたように、どうしても競争、差別、画一化、管理支配への傾向を強めることになる。しかもそれは、全体としてなんら解決にはならない故に、結局一層の混迷と不信をもたらすという一種の悪循環に陥るだけである。このような状況の中で、以上述べたようなブーバーの対話思想、平和思想は一つの展望を開いてくれるように思われるのである。

#### 註

- 1) Martin Buber, "Das echte Gespräch und die Möglichkeiten des Friedens", in: "Nachlese" (1965), S. 219ff. 尚, 以下"Nachlese"をNと略記する。(例えば, この場合, N-219ff.)
- 2) 関根正雄「イスラエル宗教文化史」(1952) 21頁。
- 3) M. Buber, "Werke" I. Bd. (1962), S. 660参照。以下"Werke" I. Bd. をIと略記する。(例えば, この場合, I-660)
- 4) 例えば, I-192, I-201f., I-204, I-275, I-277, I-285, I-421参照。
- 5) 拙稿「『対話』の構造と意義」(『神戸女学院大学論集』第79号所収) 参照。
- 6) M. Buber, "Hoffnung für diese Stunde", in: "Hinweise" (1953), S. 313ff. 参照。
- 7) M. Buber, "Bilder von Gut und Böse", I-605ff. 参照。
- 8) M. Buber, "Begegnung" (1978), S. 20f. 参照。
- 9) この会議は, 1914年6月ポツダムで開かれたが, 集まったメンバーは, ブーバーの他に, Poul Bjerre, Henri Borel, Theodor Däubler, Frederik van Eeden, Erich Gutkind, Gustav Landauer, Florens Christian Rang等であった。Hans Kohn, "Martin Buber" (1961), S. 150参照。

(原稿受理 1992年9月18日)